

資料・翻訳

トマス・ホブズ

『トゥーキューデイデースの生涯と歴史』(上)

山田園子 解説・翻訳

- 一 概説
- 二 「ウィリアム・キャヴェンディッシュ卿への献辞」
- 三 「読者への序文」
- 四 『トゥーキューデイデースの生涯と歴史』 (一部次号へ続く)

一 概説

本稿は、トマス・ホブズ (1588-1679 年) によるトゥーキューデイデース論の翻訳である。ホブズは、トゥーキューデイデースの『戦史』をギリシア語本から訳出し、1629 年に公刊した⁽¹⁾。そのさい、「トゥーキューデイデースの生涯と歴史」と題した論考を付し、トゥーキューデイデースの簡略な伝記と、『戦史』への、自身のそれも含めるさまざまな評価を明らかにした。

ホブズのトゥーキューデイデース論を訳出するのは、この邦訳がかつてなかったこと、そして、最晩年に至るまで、おそらくは一貫していただろうと考えられるホブズの歴史認識のあり様を、本論が明らかにするからである⁽²⁾。『戦史』の翻訳をホブズは、1634 年と 1648 年に再刊、そして修正版

(1) Thucydides: *Eight Bookes of the Peloponnesian warre*, interpreted with faith and diligence immediatly out of the Greeke by Thomas Hobbes, Secretary of ye late Earle of Devonshire, London, 1629.

(2) 『ビヒモス』の検討を契機とする、ホブズの歴史認識にたいする山田の関心については、「ホブズとイギリス革命」、『思想』(996 号)、2007 年 4 月号、参照。

の第二版を、最晩年の1676年に公刊した⁽³⁾。本稿ではトゥーキューディデース論の他に、『戦史』冒頭に付された「ウィリアム・キャヴェンディッシュ卿への献辞」と「読者への序文」も訳出した。それらは、『戦史』翻訳と出版にたいするホップズの動機、経緯、苦心を明らかにするからである。

内容の理解のために、まず、ペロポネーソス戦争とトゥーキューディデースについて、次に、ホップズのトゥーキューディデース評価等について、簡略に触れておきたい。

ペロポネーソス戦争は、アテーナイを中心とするデロス同盟とスパルタを中心とするペロポネーソス同盟との間に起こった、紀元前431年から404年にわたるギリシア地域全体を巻き込む戦いだった。スパルタ側が勝利したが、この戦争で疲弊したギリシア世界は、まもなくマケドニアに覇権を奪われることになる。トゥーキューディデースは、開戦当初から、この戦争が大戦争になることを予測し、『戦史』執筆を開始した。

彼の生没年は不明である。桜井万里子は「前460年頃～前400年頃」と推定し、久保正彰は、紀元前423年に30歳にはなっていたとする⁽⁴⁾。この年に彼は、アテーナイ側指揮官としてアムピポリス救援の任務を負ったが果せず、そのかどで20年の追放刑に処された。追放刑によって彼には、アテーナイ側とペロポネーソス側の両陣営に身を置いて、戦争を観察することが可能になった。ホップズによれば、彼は「全戦争を生き抜」き、没したのは68歳

(3) 「ウィリアム・キャヴェンディッシュ卿への献辞」から「トゥーキューディデースの生涯と歴史」までの印刷等を比較すると、1629、1634、1648年の3版の間に修正や変更はない。ただし、1648年版では、翻訳者ホップズの名前にThe Author of the Booke De Civeが追加される。この追加は1676年版でも同様である。1676年版は第二版として修正等がほどこされ、段落、ページ、活字組み、体裁等が他の3版と異なる。版の間での大きな相違については、訳注で明記した。

(4) 桜井万里子『ヘロドトスとトゥーキューディデース』山川出版社、2006年、12頁。久保正彰「解題」、トゥーキューディデース『戦史』(上・中・下、久保正彰訳)、岩波文庫、1966-1967年、上、11頁。

を過ぎて後、とされるが、『戦史』は戦争第 21 年目の記述で未完のまま終わっているため、その頃没したとも考えられる。追放刑の実態、アテナイでの埋葬、子供の有無についても不明点が多い。

ホップズは、『戦史』をギリシア語本から直接英訳し、当時まだ未成年だった第三代ウィリアム・キャヴェンディッシュ卿への献辞を付したが、献辞から判断すると、訳業自体は、彼の主人だった第二代が没する 1628 年以前に着手されたと考えられる⁽⁵⁾。ホップズが『戦史』を訳し、キャヴェンディッシュ卿に献じたのは、ギリシア語本から直接英訳されたものがなかった、という理由以外に、ホップズ自身がトゥーキューディデースを高く評価していたことによる。ホップズは彼を「かつて存在する中で最も政治的な歴史家」とし、キャヴェンディッシュ卿のような身分高い人々を導くには、『戦史』は最適の史書と判断した。

ホップズは歴史の任務や特質を次の三点に見る。第一に、歴史の任務は、過去の行為を知ることによって、現代においては慎重に、未来にむかっては先見の明を持って振舞うように、人を導くことにある。第二に、歴史の本性は叙述的ということにあり、かつそこでの議論は十全な論拠を持つべきものであること。第三に、逸話的説教、単なる推測や心中の思いの吐露によってではなく、歴史は明快に記述された叙述自体によって人を導くものであること。これら三点を体現したのが、トゥーキューディデースの『戦史』だった。

「トゥーキューディデースの生涯と歴史」において、ホップズは不明点の多い彼の生涯を、可能な限り明らかにし、さらに彼の歴史叙述の特質を、他の歴史家やトゥーキューディデースの批判者と対照しつつ明確にする。たとえば、トゥーキューディデース以上に高評価されることもあった歴史家ヘロドトスと比較し、トゥーキューディデースの文章の簡潔性と力強さをホッ

(5) 第二代キャヴェンディッシュ伯は 1628 年に 37 歳で亡くなり、『戦史』翻訳出版時には、第三代 (1617-1684 年) が継承している。

ブズは絶賛した。ヘーロドトスとトゥーキューディデースとを決定的に分かつのは、ホップズによれば、歴史は「目前の聴衆を喜ばせる」ものではなく、子孫のための「永遠の財産」となるべきであり、ギリシア人を襲った惨禍は真実をもって子孫に伝えられるべきだ、というトゥーキューディデースの歴史に立ち向かう姿勢だった。

ホップズの英文については、リチャード・シュラッターが、まず、1550年のトマス・ニコルズのそれと比較する。ニコルズの英訳は、1527年に初版が出たフランス語版にもとづく。それ以降、英語自体が発達をとげ、すでに1625年には、ニコルズの英文は時代遅れとなっていた。「トゥーキューディデースは我が言語に翻訳されるというよりも、長々と侮辱されるに至った」とホップズは苦言を呈する。だが、ホップズの文章も一世紀後には時代遅れとなった。1753年の『戦史』翻訳の序文で、ウィリアム・スミスは次のように言う。「原語にあまりに几帳面に執着するので、翻訳を平板かつ重苦しいものにし、その真意は蒸発して、気高く堂々たる雰囲気はまったく消えてしまった⁽⁶⁾。」だが、現代になってホップズの翻訳本を再刊したデイヴィッド・グリーンは、19世紀後半のリチャード・クローリーによる翻訳と比べて、ホップズのそれに「新鮮さと力強さ」を見ている⁽⁷⁾。

訳出用のテキストとしては、17世紀の諸版やグリーン編集本等もあるが、本稿では大学図書館等で参照が比較的容易なモールズワース版を用いた⁽⁸⁾。ページの替り目には [xi] のように、モールズワース版のページ番号を文中

(6) Richard Schlatter: 'Thomas Hobbes and Thucydides', *Journal of the History of Ideas*, Vol. VI, 1945, pp. 350-353.

(7) David Grene: 'Introduction', in *Thucydides, The Peloponnesian War, The Complete Hobbes Translation*, The University of Chicago Press, 1989, pp. viii-ix. なお、クローリー版は <http://classics.mit.edu/Thucydides/pelopwar.html> からダウンロード可能。

(8) Thomas Hobbes: 'Of the Life and History of Thucydides', *The History of the Grecian War written by Thucydides*, in W. Molesworth (ed.), *The English Works of Thomas Hobbes*, Vol. VIII, 1843 (Second Reprint 1966, Scientia Verlag Aalen).

で示した。モールズワースによる注は「編注」、山田の注は「訳注」と前置きして掲載した。モールズワースの編注で、'viii. 109' のようにある箇所は、ベッカー等の版への参照を示すが、モールズワースが具体的に何を見たか、という明確な書誌情報は無い。地名、人名等の表記は、岩波文庫所収の久保訳の『戦史』に従った⁽⁹⁾。() 付けは英文テキストに従い、[] 内語句は訳者の補充である。引用文以外に、英文テキストのイタリックの部分にも「」を付けた。

なお、ラテン語文やマルケリヌスの文献等については、吉原達也先生（広島大学社会科学研究所）のご教示をいただいた。

二 「ウィリアム・キャヴェンディッシュ卿への献辞」

[iii] 閣下、この献辞をしたためにあたり、御前のご厚意に甘えて率直に、かつ今は天に召された我が主人への信義にもとづき、大胆にも次のように申し上げます。この我が作品を、このように献呈いたします相手は、御前自身ではなく、御前の父君であるということ。というのも、この作品を完成するための時間と必需品の両方をお許し下さった、そのお方への報告としてこの作品を差し出す義務が私にはあり、我が意による献納としてこの作品を差し上げる相手を選ぶことは、私の随意にはならないからです。また、かりにそうした義務を免がれたとしても、この作品を献呈すべき方を、私はむしろ存じ上げません。というのも、父君にお仕えしてまいりました多年の経験から、自由人の学芸を自由に研究した人々を、我が御前の父君以上に真実に、かつ榮譽のためではなく愛好された方は誰もおらず、[iv] また父君以上に大学なるものを要しないお屋敷に住まわれている方は誰もいないことを

(9) トゥーキューディデース『戦史』（上・中・下、久保正彰訳）、岩波文庫、1966-1967年。

承知しているからです。というのも父君ご自身の研究の大半は、偉大な人物の労苦と時間に最もふさわしいあの種の学問、すなわち歴史と社会の学問にさざげられたからであり、しかも、学問をひけらかすためではなく、ご自分の生活の統禦と公共善のためになさったのでした。父君は学問され、その結果、研究によって取得された学識を、熟考の末のご判断にもとづいて、この国を益するための英知と能力に転じられたのです。さらに父君は国のために熱意を持って一身を呈されましたが、派閥や野心のどちらにも血道を上げるようなことはなさいませんでした。公私にわたる難事や重大事における堅実な助言と明晰な自己主張ゆえに、父君は大変有能な人物でありましたが、それと同様にまた、正義のまっすぐな道から、何人たりとも彼を引っ張りだしたり、押し出したりすることができない、そういう人物でもありました。どちらの美德にせよ、それが父君により一層ふさわしいゆえんは、(最期までそうなさったように) ご自身にそれを課す厳しさによってなのか、あるいは他人からそれを厳しく求めないという雅量によってなのか、私には分かりません。父君以上に人間をよく見抜かれた方はいませんでした。したがって、父君はもの堅い友達付き合いをなさいましたが、それは父君が「資産」や「心安さ」ではなく、その「人物」を考慮されたからです。さらに、他ならぬご自身のまっとうさと、あの「無垢」によって守られていた心を開いて、父君は友人とお付き合いされたのでした。[v] 対等な人々には対等に、目下の者には親しみを持って接しておられましたが、ご自身の尊厳を十全に保たれ、そこには、まさに生まれながらに備わった輝きがございました。要するに、人がどんな階層にあらうと、「名誉」と「正直」とが同一物であることが、その人物に明白に見て取れる、そういうお方が父君でした。したがって、この供物は、たとえそれに値しないものであらうと、父君に、かつ父君の真価の記念のために、捧げられんことを。

そして、異教徒は神々に何物かを捧げるさいに、彼らの偶像のところへその捧げ物を持ってきて差し出しますが、今やこの異教徒の「宗教的」礼拝を

まねた「俗界」の礼拝において、私は、この私の捧げ物である「トゥーキューデーデースの歴史」を、御前のところへ持ってきて差し出します。その英語訳は正確さ以上に、はるかに多くの努力を伴っています。御前は父君の似姿でありますし（というのも、御前における父君以上に正確に写しだされた人間は一人もいませんので）、そして御前は、父君の美徳の種子を、ご自身の内にすでに芽生えさせておられます。私の捧げ物を御前に舞い降りてきた諸善の一つとお考えになられ、適切な折にそれを読んでいただきたいと、謹んで御前をお願いいたします。御前にトゥーキューデーデースを私がお薦めできますのは、生意気な言いようですが、彼の血管に王族の血が流れていたからではなく、むしろその著作のゆえに彼を推薦すべく選んだからです。その著作は高貴な方々にとって役に立つ指針となることを含み、かつ重大な行動において采配を振ることを可能にするものだからです。[vi] 御前はご家庭において、英雄的美徳の卓越した模範と規範となるものを、すでにお持ちでございますが、とりわけ御前がご自身の見方にもとづいてご自分の生活を形づくられるような年齢に達しましたさいには、この書物は御前の生き方に少なからぬものを授けるだろうと、私は自信を持って申し上げます。というのも、歴史においては「名誉」と「不名誉」の行動が、それらがそういうものとして、率直かつ明白に現れるからであります。しかし、現代ではどちらもたいそう姿を変えており、それらに大きな間違いを犯さないような人間は、そしてそれほど非常に注意深い人間は、ほとんどいないでしょう。しかし、こんなことを私が御前に語るのは、疑いもなく余計なことであります。したがって、次の祈願で締めくくらせていただきます。この捧げ物が神を喜ばせ、そういう人々のために神が用意された立派な生活にふさわしい美徳が御前に与えられますように、そして、そうした美徳が導く幸福が、この世においても、その後においても御前に与えられますように。

御前の最も慎ましい僕

ト：ホップズ⁽¹⁰⁾。

三 「読者への序文」

[vii] この翻訳はすでに一部の方々の批判を受けており、その方々の判断を私は非常に大事にしております。しかし、各々方の判断がいかに厳しく、あるいは正確であろうと、それ以上に恐ろしい何ものかが、それが何か私には判然としませんが、大勢の方々の批判にはありますので、読者のご厚意を前もってお願いするのは、かくも多くの人間とかかわりを持つ誰にとっても慎重な慮りであると私は考えてきましたし、また私の場合には、完成度が欠けていますので、そうお願いするのが必要であると考えてきました。読者のご厚意を、なお一層の理由で私が望んでよければ、どんな根拠でまずこの仕事を私が手がけたのか、私は皆様に簡略にお知らせしたいと思います。そして、その公刊によって、以降私は皆様の批判という危険に我が身をさらすこととなりますが、それに伴うのは、この種の事項から期待しうる程度のかくもわずかな栄誉の望みにすぎません。というのも、単なる翻訳は次の特性をそれ自体に有していると、私は承知しているからです。つまり、うまい翻訳でなければ、それは翻訳者の多大な恥となるが、うまく翻訳されても、翻訳者のたいした誉れにはならないと。

韻文ではホメーロスが、哲学ではアリストテレスが、弁論ではデーモステネスが、そして他の学問においては古代の他の人物が、なおその首位を維持し、後の時代の何人も彼らの誰一人越えることができず、彼らの一部には近寄ることさえできない、ということがさまざまの人々によって注目されてきました。そして、我がトゥーキューディデースも、これらの人物群の中に正当に位置づけられます。先に挙げた誰にも劣らずその作品において完璧だった名匠。そして歴史を書く能力は、彼において(多くの人々と共に私もそう確信します)頂点に達します。というのも、歴史の主要にして固有の任務

(10) 訳注：1676年版では、名前の左脇に「1634」という年号が付される。

は、過去の行為を知ることを通じて、現代においては慎重に、未来にむかっては先見の明を持って振舞うように、人々を導き、そのように可能ならしめることにありますが、我が著者のこの作品以上に、そのことを自自然にかつ十全に実行する者は、他には (ただの人間には) 誰もいないからです。確かに、すばらしい [viii] 有益な歴史がたくさん書かれてきたでしょう。そしてその一部には、書き方においても考え方においても、たいそう賢明な議論が組み込まれたことでしょう。しかし議論が組み込まれても、叙述の構成に合致しなければ、それらの議論は実際には著者の知識をひけらかすだけであり、歴史そのものではありません。歴史の本性はまさに叙述的ということにあります。他には、ひそかな狙いを持った巧妙な推測や、彼らのペン先から滴った心中の思いがつつられたものもありますが、こうしたものには歴史としての最小の価値の片鱗さえありません。歴史における推測は十全な論拠を持つものであり、自分の文体を賛嘆し、または推測の巧妙さを明示するという、著者の目的に資するよう強いられるものではありません。しかし、叙述自体が大変明快で、読者にもまったく同じことを示唆するに充分でなければ、これらの推測が確実だということは、そう頻繁にはありえません。トゥーキューディデースは自身の文章上で、道徳的または政治的なお説教を読ませるような脱線を決してせず、行為自身が明白に導く以上に人々の心へと入り込んでいくこともありませんが、しかし、かつて存在する中で最も政治的な歴史家だとみなされる、そういう人物です。その理由を私は次のように考えます。彼は自分の叙述を、事物のあの選択によって満たし、あの判断で叙述を秩序づけ、プルタルコスが言ったように、自分の聴衆を観衆にしてしまうほどの明快性と効果でもって、自身を表現したからです。彼は読者を、議論のさなかの人民集会に、そして元老院に、反乱の街角に、そして戦場に置きます。その結果、もし分別ある人間が当時生きていて、彼らのやり取りを注視し、そして当時の人間や事態をよく知っていたとすれば、ここで当のことが書かれたものを注意深く読むことで、どれほどのものを彼の経験に付加すること

ができ、またそれとほとんど同程度の大きな利益を今や得られるか、ご覧あれ。彼は、その叙述から自身への教訓を引き出すことができ、かつ行為者の意向や考えを自分で追跡して、その核心に至ることができるのです。

我が著者のこれらの長所は、私の気持ちをたいそう引き付け、著者ともっと付き合いたいという欲求を私の内に芽生えさせました。それが私を彼の翻訳へと動かした最初のきっかけでした。われわれを喜ばせるものは何であれ、すべての人々にも同様の仕方や程度で受け入れられるだろうと思ひ込むことは、そして同じ事物なら好き嫌いは一致するとお互いの判断を評価してしまうことは、われわれが容易に陥る誤りであります。[ix] そして、彼のことを知ってもらいたいと私が願う賢明な人々の多くは、私自身と同様に彼を好きになるだろうと私が思ったとき、こうした誤りに私はおそらく陥っていました。さらに私は次のようにも考えます。彼はイタリア人やフランス人から彼らの自身の言葉で非常によく評価されているのですが、にもかかわらず、そのことでは彼は翻訳者にはあまり恩義を受けてはいないでしょう。翻訳者について（ここで言うのは、その種の仕事で皆様からの高い評価に値する者にすぎません）私は次のように言ってもいいでしょう。著者自身は自分の灯りを携えてずっと歩んできたので、読者には彼の行く手にある道がいつも見えており、何がその先に起こるのか、その行く手にあるものから予想できますが、そういうことは翻訳者の場合には当てはまらないと私は考えます。その原因は、そして翻訳者の弁解はこうです。彼らはラウレンティウス・ヴァラのラテン語に従ったが、それはいくつかの誤りを免れておらず、かつヴァラは、現存するほど正確なものではないギリシア語本に従ったと。エドワード六世時に、トゥーキューデイデースはフランス語から英語にされ（英語で彼を読んだことを隠す必要は私にはありません）、しかし、それだけに誤りが増えてしまい、トゥーキューデイデースは我が言語に翻訳されるというよりも、長々と侮辱されるに至ったのでした。そのため、エミリウス・ポルタの版に従って、直接ギリシア語から彼を訳そうと私は決意しましたが、入手

できた版、注釈、または他の助けを拒否も無視もしておりません。骨を折り時間をかけて私は翻訳しましたので、いくつか誤りが残っているとしても、それらは一度限りの誤りになるだろうとは思いますが、そうした誤りを今は私は見つけ出すことができませんし、それが多くないことを願っております。翻訳を終えた後、それは私の手元に長い間留まり、他の理由が生じて、それを公刊したいという私の望みが中断しました。

というのも、大部分の人々は、ローマ人の持つそれに非常によく似た感情を持って、歴史を読むに至ると私は知ったからです。ローマ人は、剣闘士の防禦の技よりも、彼らの血を見る喜びでもって彼らを眺めました。軍隊や都市での出来事がその終焉へと導かれる術策を気にかける者よりも、大軍、血生臭い戦闘、そして何千人もの一気の殺戮を読みたい者の方が、数においてはるかに勝っていたでしょう。同様に私が気づいたことは、この歴史書で遭遇する地名にその耳がよくなじんでいる者は、多くないということでした。[x] それらの知識がなくては、特にこの書のように地名が多数登場する場合には、忍耐強く読まれることも、完全に理解されることも、容易に記憶されることもありえません。この戦争の主要な二つの舞台となったギリシアとシケリアの両方にあった大概の都市は、あの時代にはそれ自体が別個のコモンウェルス、そして反目しあう一つの党派でした。

しかし、その後私は次のように考えてきました。読者の内の少数かつ優秀な層を相手にして満足できる者にとっては、これらの考慮の内、前者を重要視すべきではないということです。その者にとっては、こうした読者だけが判断し、それに応じた彼らの賛同だけが重要です。そして地名の無知から生じる問題にかんしては、さほど克服しがたいものではなく、それらの国々の便利な地図があれば、その問題は解消されるだろうと私は考えました。そのためには、二つのもの、ギリシアの概略図とシケリアの概略図が特に必要だと考えました。後者については、フィリップ・クルヴェリウスによって正確に作成されたものが、すでに存在しています。その一部を切り取って、第六

書の巻頭に載せました。しかし、ギリシアの地図については、この目的に十分なものを何一つ見つけることができませんでした⁽¹¹⁾。トレミーの図版も、彼に続く人々の図版も、トゥーキューディデースの時代に該当するものではありません⁽¹²⁾。したがって、彼が言及した場所のほとんどがそこに描かれておらず、また当の歴史の事実に常に合致するような、そういう図版ではありません。そのため、私は可能な限り善い地図を自分で作成することを強いられました。そこで、私はギリシアの大概図を、現在定評のある図版に頼ることにし、この著者を読むさいに登場する場所を特に選び出して（その図版に可能な限り多く）、その図版上で場所を確定しました。場所の確定については、ストラボン、パウサニアス、ヘーロドトス、そして幾人かの善き著者達の旅行記にもとづき、その地名がそこにあると私が考えたものです。そして、正確に設定したのは主要なものわずか一部のみであり、他のものはヤマ勘でもって注意も払わず分別もなしに設定するような香具師を、私はそこで演じてはいないことを皆様に知っていただくために、当該地図に索引を付しました。それは、私が他の人々と異なっている箇所で、私の方が正しいことを明らかにしてくれそうな著者達に向けられたものです。これらの地図と、それが非常に必要だと私が考えた箇所への少数の簡略な欄外注があれば、[xi] この歴史は充分な分別と教育を持ったすべての人々によって、たいそうな利益を伴って読まれるだろうと（そうした人々のために、そのことはトゥーキューディデースによって当初から意図されていました）私は思い、それが受け入れられる望みがないわけではありませんので、とうとう私の労作を公開

(11) 訳注：私が見たマイクロフィルムの複写では、シケリア地図は全版において第六書の直前にある。他方、ギリシア地図は1648年と1676年版のみに、しかも第一書の直前に挿入されている。

(12) 訳注：モールズワース版では Ptolomy となっているが、英語で通常 Ptolemy と書かれるクラウディオス・プトレマイオス（85-165年）のこと。1676年版は Ptolomy、他版は Ptolomic である。

することにしました。もし私の目的が遂げられませんでしたら、それは他ならぬこの著者の卓越した資質のおかげですが、それで充分です。

四 『トゥーキューディデースの生涯と歴史』

[viii] トゥーキューディデースの名を持つさまざまな人々がいる。一人はバルサロスのトゥーキューディデースで、本書第八書に登場する。彼はバルサロスのアテーナイ権益代表であり、四百人体制が崩壊し始めたさいにアテーナイに居合わせ、当時武装していた諸党派の衝突を、彼のとりなしと説得によって回避させて、コモンウェルスを崩壊させるような戦いをアテーナイで起こさずに済ませたのである。メレーシアースの子、アロープの町のアテーナイ人トゥーキューディデースもいた。彼についてはプルタルコスがペリクレースの伝記中で触れているが、おそらく本書第一書において、ペロポネーソス戦争開始のおよそ 24 年前に、サモスと戦うべく送られた 40 艘の船隊の責任者と書かれた人物だろう。さらにアリストンの子、アケルドゥスの町の同じくアテーナイ人であるトゥーキューディデースは詩人だったが、彼の作品は何も現存していない。一方、この歴史書の著者トゥーキューディデースは、ハリムスの町のアテーナイ人であり、オロロスとヘーゲシピュレーの子である。父の名は普通 Olorus と書かれるが、墓碑銘は Orolus である。どのように書かれようと、彼はトラキア人の王家の末裔として生まれ、王家の血筋にある者の尊厳が彼に備わっていた。その結果、我が著者は（キケロが『弁論家について』第二巻で彼について語ったように）自身の栄誉や高貴な身分にかかわる歴史は決して書かなかったが、こういう点で彼の名前が世に残らないということはなかった。そして、彼がトラキア王家の末裔だということは、プルタルコスがキモーンの伝記中で完全に確信しているばかりでなく、この点に触れた他のほとんどすべての者もそう確信している。[xiv] それを立証するために次の例をあげておく。彼はミルティアデース家の者で

あり、ミルティアデースはマラトーンでペルシア軍と戦ったアテーナイの有名な武将であるが、そのことをさらに証明するのは、彼の墓は長い間ミルティアデース家の墓碑群の中にあつたということである。つまり、アテーナイの市門の近くメリティデースと呼ばれるところにコイレーという場所があり、そこに「キモニアーナ」と呼ばれる墓碑群があるが、それはミルティアデース家のものであり、当家に属する者以外の誰もそこには埋葬されることがない。そこにトゥーキューディデースの墓碑があり、THUCYDIDES OROLI HALIMUSIUS という銘が刻まれている。ミルティアデースは今では、トラキア王オロロスの末裔だったと皆に認められている。王オロロスの娘が、別のミルティアデース、つまり武将ミルティアデースの祖父と結婚して子を得た。そしてマラトーンで記念すべき勝利を得たミルティアデースは、トラキアのケルソネーソスにおいて相当な所領と町を相続し、そこを治めたのである。トラキアにはトゥーキューディデースの所領と豊かな金鉱もあり、そのことを第四書で自身が明らかにする。そうした富は、スカプテー・ヒュレーで結婚した妻を通じて、彼のものとなったようだが（一部の者によっても、これは確かなこととされている）、しかし、この結婚によっても、彼の身辺の出来事はトラキアとかかわりを持ち、かつ彼の高貴な生まれが当地で知られていないことはなかった、ということが明らかになる。だが、ミルティアデースとトゥーキューディデースがどの程度の親族付き合いを互いにしていたかは、どこにも明白ではない。一説にはさらに、彼はペイシストラティデース家の者だったと推測されているが、この推測の根拠は、ペイシストラトスと彼の子らの統治をトゥーキューディデースが讃え、かつハルモディオスとアリストゲイトーンの栄光を軽んじたことに求められるのみである。トゥーキューディデースは、アテーナイ人の国がペイシストラティデース家の専制から解放されたことが、間違つて彼ら〔ハルモディオスら〕の功績にされ（それは女をめぐる個人的な復讐から出たことである）、それであるの専制が終わつたのではなく、一層国にとって重荷となり、最後はラケダイ

モーン人によって倒されたことを明らかにしたのである。こちらの見解〔バイストラティデース家の者だったこと〕にはさほど十分な根拠がないので、前に述べたものほどによく受け入れられてはいない。

弁論や哲学の研究における彼の評価は、彼の高貴さに相応する。〔xv〕哲学において、彼はアナクサゴラスの門下であり（ペリクレスやソクラテースと同様に）、その見解は庶民の理解を越える傾向を持ち、無神論者という評価を頂戴する羽目になった。自分達の愚かな宗教について自分達と同じように考えない者には誰にでも、そういう呼び名を人々は与え、ついにはその命さえ犠牲にさせたのである。そして彼の後、ソクラテースは同様の原因で、そういう運命を辿った。したがって、アナクサゴラスのこちらの弟子も無神論者であると一部の者が評したとしても、そんなことはたいして重視されるべきではない。というのも、彼が無神論者でないにしても、こうした異教徒の宗教を自然的理性の光によって十分に観察し、その結果、それを空疎かつ迷信的なものとするに至ることはありえないことではなく、そういうことは人々の見解において、彼を無神論者に仕立て上げるには充分だからである。本書のあちこちで彼は神託の曖昧性に注目するが、しかし、この戦争が進行する時期にかんしては、神託の預言で自身の主張を固めた。ニーキアースが神託によって自身や軍隊を省みなくなり、実際に自分の国にたいする支配権と特権のすべてを放棄したときには、トゥーキューディデースは彼を、宗教儀式的の遵守にあまりに几帳面だと非難した。だが、別の箇所では、彼が神々を礼拝することを讃え⁽¹³⁾、その点で、彼が被ったこのような不運に至るには、彼は誰よりもふさわしい人間ではない、と言ったのである。したがって、作品中の我が著者は、一方では迷信的ではないように見え、他方で

(13) 編注：ここで念頭に置かれている句（第七書 86）はベッカーによって修正されて、「神々を」が削除されており、ニーキアースを称賛するのは徳を重んじる点のみとなる。
 訳注：久保訳でもホップズの英訳でも、第七書 86 では、ニーキアースの神々礼拝は触れられていない。

は無神論者ではないように見える。

修辭において彼はアンティポーンの弟子だった。(本書第八書の描写によれば) アンティポーンはその言論力ではほとんど奇蹟のような人物であり、その雄弁ゆえに人々から恐れられていた。彼は晩年は引退したが、彼を頼ってやってきた人々に助言を与え、演説を書いてやった。人民統治の廃止と四百人体制の設立を画策したのは彼だった。それゆえに、人民統治が再びその権威を回復したさいには、彼は自分の大義を当時の最良の人々に訴えたが、死刑に処された。

[xvi] こうしたことから、トゥーキューディデースには、大デマゴグになり、人民と共に大なる権威を持つ資格が充分にあったことは、疑われるべくもない。しかし、彼には政治に介入する気持ちはまったくなかったようだ。というのも当時において、コモンウェルスに善き有益な助言を与え、かつ人民の不快を買わないことは、誰にも不可能だったからである。人民の見解は人民自身の力を、そして彼らが手がけるどんな活動もやり抜いてしまう能力を伴うものであり、そのため、人々を最も危険かつ絶望的な企てへと乗り出させるような者達だけが集会を左右し、かつ賢明にして善良なるコモンウェルスの人間だと評価されたのである。他方、穏健かつ慎重な助言を人々に与える者は、臆病と考えられたか、または理解されなかったか、そうでなければ、人民権力を中傷する者だと思われた。そして驚くなかれ、多大な繁栄（彼らは今やその繁栄に多年の間慣れてしまっていた）のせいで、人々は自分自身を愛好するようになってしまう。誰にとっても、自分自身をあまり好きになれないようにさせる類の助言を好むことは困難だ。そのことは一人の人間よりも大衆において、よりよく当てはまる。自分自身で論理を立てて考える者は、より強力に備えられるような細心な助言を、自分の職務において認めることを恥じないだろうが、しかし、大衆を前にした公的議論においては、恐怖は（それは、その通りにはならないとしても、おおむね善い助言となる）めったに、あるいは決して姿を現さないか、または許されない。こ

のために、何でもやれると考えていたアテナイ人の間で、次のことが生じた。邪悪な人間や追従者が、彼らを破滅させるような戦闘へと軽率にも駆り立て、善良な人々はあえて反対しなかったか、かりにそうすれば自分が破滅した。トゥーキューディデースはしたがって、そうした悪を犯す人間でもなければ、悪を引き受けてあえて集会に加わる人間でもなかったろうし、かくも富裕な人間の卓越性と、彼が手がけた歴史の執筆が許す限り、私生活に引きこもったのである。

国の統治にかんする彼の見解で明白なことは、彼が民主制を少しも好んではいなかったことである。さまざまな箇所では、世評と英知の誉れを求めるデマゴグの競争と対抗に注目する。それに伴うのは、公共性を毀損するほどに他人の見解を互いに非難し合うことであり、[xvii] 演説者のさまざまな目的や弁舌力が決議の非一貫性を引き起こした。さらに庶民にたいする権威や影響力を得たいと願い、また得たものを保持したいと願う人々の追従的助言を根拠に、自棄的な戦闘が断行される。だが、トゥーキューディデースはどこにおいても、「少数者」の権威を称揚するようには見えない。そうした人々の間では、彼が言うには、誰もが長となることを希望し、低く見積もられる人々はそういう希望を、民主制における以上にあせて持つのである。そうすると反逆が、そして政府の解体が生じる。トゥーキューディデースが称賛するのは、「少数者と多数者」の混合だったときのアテナイの統治であり、しかし、もっと称賛するのは、ペイストラトスが統治したときと（それが篡奪権力だったことを除いて）、そしてペリクレスが統治したときの両者である。ペリクレス下の統治は、この戦争開始当初、名目上は民主制だったが実際には君主制だった。トゥーキューディデースは王家の末裔であっただけに、王の統治を最も是認しているように見える。だから、彼がコモンウェルスの事項にできる限り関与せず、むしろ、統治の運営者によってなされたことを観察し記録することに専念したのは、驚くべきことではない。さらに、そうした仕事の完遂は、自身の財産、威光や英知が可能にした面も

あるが、同様に、彼の気質からして機敏、勤勉、誠実だったゆえでもある。この種の仕事に彼がどのように向かっていったのか、次のことから分かるだろう。若い頃、歴史家ヘーロドトスが公衆の前で歴史を語るのを聞き、(当時と同様、何年か後においても、これは決まったやり方だった)、大変な競争意欲を駆り立てられて泣いたのである。ヘーロドトス自身、彼の気持ちをいかに激しく文字に載せられるかに注意し、そのことをトゥーキューディデースの父オロロスに語っていた⁽¹⁴⁾。ペロポネーソス戦争が始まると、[xviii] それは自分の骨折りにふさわしい主題になるだろうと心底から予測し、戦争が始まるや否やトゥーキューディデースはその歴史を書き始めた。われわれが今見るような完全な様式ではないが、間々生じて、彼が知るに至った戦闘や経過に注釈をつけ、あるいは明白な記録を残すという方法で、戦争を追跡した。だが、そうした注釈は、他の者によって書かれる歴史よりも好まれるべき価値の多分ありそうな、そういうものだった。特に第八書は、彼が書いた当初のままに残されている可能性が多分にある。それは、先行七書に見られるように⁽¹⁵⁾、演説によって彩られることもなければ、物事の推移にもさほど固執していない。戦争が勃発するや否や彼は書き始めたが、彼の歴史を改善し練磨する努力を開始したのは、彼が追放されて後のことである。(次号へ続く)

(14) 編注：この話は一般に作り話と考えられている。オリンピック競技場でのヘーロドトスによる歴史の読誦自体が疑問視されている。ゲラーが言うには、「ヘーロドトスによって歴史読誦が行われたことを、私は快く信じる。しかし、トゥーキューディデースがその場に居合わせ、心から讃嘆の念に打たれ、聴いている間に涙した、ということは、後代のギリシア文献が、祖国や軍事上の著名な人物について作り出した、数多くの虚構の一つであると私には思われる。」Thucyd. p. 43 を見よ。

訳注：ホップズは典拠を記載していないが、マルケリヌスの『トゥーキューディデースの生涯と話体にかんする注釈』の第54段落の情報が、ホップズの記述通りである。マルケリヌスの文献は、下記のHPで英文で読める。http://www.msu.edu/~allenwi/translations/From_the_Comments_in_Thucydides_By_Marcellinus.pdf

(15) 編注：viii. 109 注を見よ。